

困ったときの解決法(複数回答可, 20名中²)

- あきらめる(8名)
- 家族に教えてもらう(8名)
- 知人に教えてもらう(5名)
- 本で調べる(5名)
- インターネットで調べる(2名)

2-3 パソコン教室の位置付けと目標設定

2-3-1 学生のリテラシー向上のための試み

学生のリテラシー不足の主たる原因は、意欲の不足とそれに起因する利用機会の少なさ、特に活用のためには実践が不足していることにあり、筆者らは考える。

パソコン教室で教える立場に立つことは、その問題を改善する試みである。他人に教えるためには、より深く正確な理解が必要であり、相応の準備も必要となる。本稿では最終的に、このような学習機会の設定が学生のリテラシー向上に有効であるか、また、意欲を高める効果があるかどうかを評価する。

2-3-2 パソコン教室プロジェクトの目標設定

実践を重視するため、パソコン教室は学内でのシミュレーションではなく、実際に学外の初心者の方に教えるものである³。また、学生自身の学習が出発点ではあるものの、パソコン教室としての目標を明確におき、受講者に評価してもらう。そのため、初心者に理解してもらい、ある程度使えるようになることを柱とする顧客(受講者)満足度を重視することとした。

2-4 筆者らのパソコン教室の特色

既に述べたように、パソコン教室への一定の需要はあると考えられるが、筆者らなりのメリットがなければ前述のパソコン教室に関する目標を達成できず、そもそも受講者が集まらず、実現できない。

筆者らのパソコン教室の特色としては、以下のようなことが挙げられる。

2-4-1 無料(もしくは非常に安価)

無料⁴で実施できるのは、学生側が講師を務めることを自身の学習として位置付けており、Give&Take の関係が成り立っているからである。

2-4-2 スタッフの多さ

スタッフが多いことにより、前に立つ講師役を務めるのは1人⁵であるが、多くのスタッフが受講者の間に立ち⁶、質問に答えたり、個々の学習ペースにあわせて補助ができたりするというメリットがある。特に初心者は小さな

ことでつまづくこともあり、個々のペースに差ができてしまうため、この点は重要である。経済的に余裕があればマンツーマンも可能であるが、無料で多くのスタッフを配置したことが最大の特徴である⁷。

2-4-3 受講者側の希望への対応

受講者側の希望への対応については、3年間すべて何らかの団体から依頼を受けたものであり、内容・場所・時間・期間等、なるべく受講者側の希望に添って計画を立て、実施したものである。

このように団体でパソコンを勉強しようとしたとき、予算があれば職業インストラクタに依頼することもできるが、小さな団体では難しいこともある。また、アンケート結果に、既存のパソコン教室に自分にあうものがないというような声があったように、未だ残る需要に対応する意味で重要と考える。

2-4-4 スタッフが学生であることそのもの

最後に、講師が大学生であるという点であるが、教える学生が自分自身の学習・能力の向上の機会と位置付けていることから分かるように、必ずしもメリットとはいえないが、入門的内容であれば、準備次第で十分可能であり、また、自身の初心者時の経験を活かしやすいことはメリットと考えられる⁸。

この点については、受講者へのアンケートで大学生が教えることへの期待が大きかったという結果が出た。具体的な理由はアンケートからは分からないが、専門家の先生は難しくなりすぎたり、目上の先生には遠慮してしまったりするのに対して、学生は親しみやすく、逆に、子供でもないのに一定の頼りがいがあると受け止められたのではないかと推測している。

3 学生は3年間でどこまでできたか

表1に1~3年目のパソコン教室の概要を示す。本節では、3年目を中心にパソコン教室での学生の取り組みについて述べ、パソコン教室プロジェクト自体を評価する⁹。

3-1 パソコン教室における学生の創意工夫

スタッフは講師役と補助役に分かれるが、講師役は学習と経験を積む観点から原則として1回生か未経験者が担当している¹⁰。また、講師役は単なる話者ではなく、内容の検討や資料作りにおいても中心的な役割を果たす。

内容としては、今回の受講者は初心者が主であり、ワープロの使い方が中心となるが、事前のアンケートや受講者側代表者の方とも相談した結果、名刺やチラシ作り

² この設問のみ、実際の受講者ではなく、募集段階での受講希望者の回答結果であり、他の設問と若干回答者が異なっている。

³ 対象を初心者に限定するのは、筆者らが1回生中心の文科系の学生であるため、あまり高いハードルを設定することに無理があるからであり、逆に教えるための準備が十分なハードルとなり得ると考えるからである。

⁴ 教材(フロッピー、ファイルなど)についてのみ、実費負担してもらったことがある程度。

⁵ 交代で複数人が担当する場合はある。

⁶ 2年目以降、受講者と1対1に近い割合を集められた

⁷ なお、現在の学生はほとんどが最低限のパソコンを使う技能は持っており、また、人数が多い。これはスタッフを多くできる潜在的な可能性があるということであり、他に匹敵する質と量を確保できそうな集団はないと思われる。また、仮に有料とするにしても学生アルバイト料の相場を考えれば、人件費を安くしやすい。

⁸ 逆にいえば、コンピュータの専門家であることや詳しいことが、教えるのがうまいことの十分条件ではない。

⁹ 1年目については小田(2002)が、2年目については黒田(2003)が既にPCカンファレンスで報告済である。

¹⁰ 1回生前期の必修科目で最低限の操作法は学んでいる。

といった形に残るものを作ることにした。

細部については、1,2年目¹¹と重複する部分もあり、誌面の都合もあるので、カンファレンス当日に紹介予定であるが、身近な内容、具体的な作成例、原則として1回で完結¹²しながら3日間でステップアップするような構成、終わってから1人でも復習できるような授業内容の詳しい資料¹³など、受講者に興味や目標を持ってもらえるように工夫したつもりである。

3-2 アンケートに見る受講者の満足度

全日程終了後に受講者に協力していただいた主なアンケート結果を以下に示す。16名から回収した。

良かった点(16名中)

- 説明が分かりやすかった(15名)
- スタッフに気軽に質問できた(13名)
- スタッフが多かった(11名)
- 資料が分かりやすかった(9名) 以下省略

良くなかった点(16名中)

- 授業内容で資料から漏れていた点が多い(2名)
- 資料が難しかった(1名) 以上

配布資料を活用しましたか?(16名中)

・はい(13名) ・今後活用したい(3名) ・いいえ(0名)

また参加したいですか?(16名中)

・はい(13名) ・内容次第で参加したい(3名) ・いいえ(0名)

以上の結果から前回と同様、一定の評価は得られたと考えている。

4 学生自身の学習の分析

4-1 パソコン教室プロジェクトに必要な能力

今回のパソコン教室を実施する上で、パソコン操作の知識が必要であったのは当然であるが、パソコンの機能には限りがないので、知っていることよりも自分で調べられることが重要であった。また、他にも様々な能力が必要であることが分かった。

- 企画力、計画性
- プレゼンテーション能力(話し方や自分の考えを整理して形にすることなど)
- コミュニケーション能力と協調性

参加者が今回の経験でどれだけこれらの能力を高められたかを客観的に測ることは難しいが、このようなことには実践経験を積まなければ向上しない性格があると思われるので、少なくともその一歩にはなり、その重要性に気付いたことに意義があったと考えている。

4-2 パソコン教室の3年間の進歩

4-2-1 参加者の増加

1年目は参加スタッフが少なかったが、2年目以降はサークルの人数増加と相まって参加者が増えてきた。これ

によりきめ細かい補助が実現できた。

4-2-2 アンケートの実施と反省

1年目は反省会を開いたものの、受講者にどう評価されたかが分からなかった。2年目以降はアンケートを実施するようにしたことで、課題がより明確になり、次に活かすことができるようになった。

4-2-3 課題の改善

2年目の前回は受講者から一定の評価をいただくことができたが、黒田(2003)が述べているように、問題点も多かった。リーダーの不在やそれによる運営上の問題は、経験者の先輩をリーダーとし、スケジュールを明確に立てたこと、また、分担を工夫し、経験者・先輩が未経験者・後輩を指導・補助し、班ごとのサブリーダーとしてリーダーを助けるようにしたことで改善された。また、依頼から実施まで期間が従来よりも長かったこともあるが、前回の反省を活かし、準備に時間をかけ、コミュニケーションを密にすることができた¹⁴。

予行演習を実施したことも今回の大きな改善点である。予行演習は講師役が話す練習になるだけでなく、その後の意見交換による問題点の洗い出しができ、また、補助役のスタッフの理解もより深めることができた。

他にも準備として、本番で使用する施設・機材の下見と最終確認を行った。パソコン等の機材を使う場合、実機で試さないと思わぬ落とし穴がある。ここでも前回の反省を活かした。

以上のように前回の課題については、完全とはいえないが、すべての面で一定の改善を行った。

4-2-4 学生自身による企画・実施

1,2年目のパソコン教室は、教員経由で依頼があったか、または教員への依頼を代わって引き受けたものである。そのため、相手先との交渉は教員が行い、企画も大枠は教員から示されていた。学生は経験が少ないため、教員の助言・協力を頼るところも大きかった。

3年目はそれまでの経験から、直接学生が依頼を受け、企画段階からほとんど学生のみで実施することができた。筆者らは当時まだ1年生であったが、経験者の先輩の運営、指導によりなんとか無事終えることができた。

4-2-5 今回の反省と今後の課題

今回も反省会で課題が挙げられた。まず、本番が1日おきだったせいもあるが、事前準備段階に比べて、本番とその間のスタッフ間コミュニケーションができなかったことがある。本番はやはり予定通りにはいかない面があるが、そうした場合は講師役と補助役間の連携、また担当日の異なる各班での連携が不十分だった。

他にも、アンケートで事前に比較的高いスキルの高い受講者がいることが分かっており、その人たちのために発展

¹¹ (小田,2002)(黒田,2003)

¹² 個人的な都合や、あらかじめ発表した予定を見た上で日を選んで参加する受講者もいたため、基本的に1回完結が前提であった。

¹³ 事前にアフターケアの希望が多かったが、直接実現することは難しかったため、配布資料に力を入れた。

¹⁴ 打合せについては、他の班の進行状況などを把握するために月数回全体で行い、週に1回は各班で行うようにした。また、スケジュール管理と連絡がしっかりしたことにより、リーダーや講師役以外のスタッフの準備段階での参加も促進された。

的な内容を用意することを考えていたが、実際にはそこまでできなかったことなどがある。

4-3 学習意欲につながる要因の検討

今回、誰もが予想していた以上に、参加者は意欲的に取り組むことができ、また、その過程を楽しめた。率直に言えば、1 回生(当時)は当初、先輩や教員の誘いで参加してもいいという程度の気持ちであったが、終わってみて、参加してよかった、またやってみようという気持ちを持っている。役割によっても異なるが、講師役を務めた学生は、1 回生時のコンピュータリテラシーを学ぶ必修科目のための自習よりもはるかに時間と労力を費やした。また、その過程で受身の姿勢では持たなかったような興味や疑問を持つようになった。

これだけ意欲を持った原因をスタッフ間で議論した結果、以下のような要因が挙げられた。

- 責任と緊張感
- 協力と競争意識
- 自己の現状認識
- 広い対象とのコミュニケーション
- 達成感とやりがい、楽しみ
- 他人に教えるという経験そのもの

具体的には、学外の方を相手にするため、授業よりも責任があり、それが適度な緊張感につながった。また、辛いときにも仲間がいたこと、時には助けてくれること、良い結果を出した仲間やがんばっている仲間がいると自分もがんばろうと感じたこと、予行演習などで自身の至らない点に気づいたこと、今までになかった人たちとの交流、仲間とのより深い交流が新鮮であったことなどである。そして、月並みではあるが、苦労もあった分、やりがいもあり、やり終えた後の達成感があった。これはやってみなければ分からなかったことであり、何事にもまず挑戦すべきだということを改めて実感した。

また、教える側に立った筆者らは 1 年目の時から、自然と受講者が楽しめることを重視してきた。これはパソコン嫌いになることを防ぎ、逆に好きになり、自ら学ぶようになって欲しいからである。つまり、教える立場になれば、自然と学習意欲の重要性を意識するきっかけになり得る。

5 おわりに

本稿では、パソコン教室プロジェクトが教える学生の学習の機会として有効であったことを述べた。その後の本稿執筆過程も含め、少なくとも筆者らにとって非常に良い勉強になったことは確かである。

しかし、この企画が学生の意欲を高めるとしても、大部分は参加し、始めてみないことには効果がない。筆者らが、参加することになったきっかけは過去のパソコン教室に参加した先輩の存在である。今度は筆者らが後輩に伝えていく番であると考えている。

今後の課題としては、パソコン教室プロジェクト自体の継続と発展がある。前述のようにまだパソコンを使えるようになりたいと考えている人はいるはずであるが、筆者らが多少なりとも協力できたのはわずか 3 団体に過ぎない。今回は自身の学習の観点から、準備に時間をかけたことに意義があったが、今後はその経験を活かし、より短い準備時間でより良い結果を出す工夫が必要だろう。また、受講者側から希望のあったアフターケアについても現時点では実現が難しい。

最後に、筆者らの提供できる機会には、地域的にも回数的にも限界がある。この報告が、同様の活動が広がるきっかけになれば幸いである。

謝辞

今回のパソコン教室において、教室を提供して下さった堀江小学校、参加された PTA の方々と企画段階からご協力いただいた代表の金子敦子さん、また全体を通してご指導と励ましをいただいた愛媛大学法文学部の岡本隆、崔英靖、橘恵昭の 3 先生、そして参加した学生スタッフ全員に心から感謝します。

参考文献

- 小田裕士・他(2002)「中学校の情報教育授業での大学生の講師体験」PC カンファレンス 2002, pp.28-29.
 黒田陽子・他(2003)「大学生による親子パソコン教室」PC カンファレンス 2003, pp.99-102.
 橘恵昭(2003)「情報リテラシー教育を通じた学びあいの実践」PC カンファレンス 2003, pp.97-98.

表1 パソコン教室の概要

	1 年目	2 年目	3 年目
対象	中学生(1~3 年混在)	小学生(1~6 年)とその保護者	小学校の PTA
受講者数	40 名(のべ 80 名)	17 組 34 名	16~18 名
時期	10 月~11 月	11 月~12 月	3 月末(春休み)
期間	2 日(受講者は総入れ替え)	3 日(期間中毎週土曜)	3 日(1~2 日おき)
時間(1 回当り)	80 分(2 時限分)	120 分	90 分
授業内容	パソコン・インターネットの基本的な使い方	ネットサーフィン, デジカメ(撮影, PC への取り込み, 加工), 年賀状の作成	ワープロの基本操作(名刺, チラシ・新聞作り)
準備期間	約 1 ヶ月	約 1 ヶ月	約 4 ヶ月
スタッフ数	5 名	12~19 名	14~18 名

